



同志社人物誌 (56)

磯 貝 雲 峰

河 野 仁 昭

同志社時代

明治二十三年から二十八年あたりまで、詩人として活躍した磯貝雲峰（本名由太郎）が同志社英学校普通科に入学したのは明治十八年九月で、二十二年六月に卒業した。在籍期間は四年だから、二年に編入学したものとみなければならぬ。編入学したとき二十歳であった。当時としても早い就学とはいえない。

彼が生まれたのは慶応元（一八六五）年六月八日（陽暦六月三十日）。父内田仁八郎は群馬県碓氷郡九十九村大字下増田字百石（現在の松井田町大字下増田）で商業を営んでい

た。雲峰には二人の兄と一人の姉があるが、いずれも腹ちがい、雲峰と弟兵三郎は仁八郎の後妻の子であった。雲峰が明治十二年五月、母の実家の養子となるのは（相続は同十九年十二月）そうした出自と無関係でない。雲峰の死後は、弟兵三郎が由太郎（雲峰）の養子のかたちで磯貝家を継いでいる。

同志社へ入るまでの経歴はかならずしも明らかでないが、郷土史家の調査によると、下増田の宝蔵寺の寺小屋に学んだあと、内田家の近くの小学校に通い、更に九十九村の細野東小学校に学んだ。当時、この小学校の校長

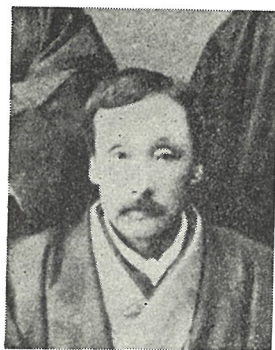
は、柏木義円であったといわれる。

義円は明治十三年に同志社英学校に入学したが、翌十四年に退学し、十五年から九十九村の小学校に勤めた。だから、雲峰は義円の教えを受けたわけである。義円は十七年一月に安中教会の牧師海老名弾正によって洗礼をうけ、翌十八年に同志社へ再入学する。

雲峰が直接記したものはないが、この義円の感化によって同志社への入学を決意したのではないかと想像される。従来、同郷の先輩湯浅吉郎（半月）の勧めによることだといわれてきた。雲峰の受洗についても目下のところ確証はえられないが、義円と同じころ、安中教会においてではなかったらうか。

同志社へ入学した義円・雲峰の子弟は、同級生として机を並べ、同じ年に卒業するのである。

同志社時代の雲峰について、「協志社（同志社）の栗色に塗った小さな正門と南門西門を午前六時に開け午後十時に閉める外は夜間の受付に当るきりであったが、仕事の為に特に与へられた室は、一寮階下東南隅の日当りの好い六畳であった」（『徳富蘆花「黒い眼と茶色の目」』）と蘆花はかいている。明治十年代か



池 袋 清 風

ら、同志社は学資の支弁困難な生徒に、受付や時報の打鐘、外国人数員に対する日本語教授などをやらせて修学援助をおこなったが、雲峰が受付の仕事を与えられたのは、あるいは義田の推薦があつたのかも知れない。

蘆花は明治十一年に入學して一度退學していたのであつたが、十九年に三年生に編入して偶然雲峰の同級生になり、二人は急速に親しくなつた。蘆花は陽当りのよい雲峰の部屋へ入りびたつて、「何時となく柔順な女房の感じで片貝（磯貝）君に対した」（同前）と書いており、その描写には同性愛的なものさえ感じられる。蘆花のほうが二歳年下だが、雲峰は小柄でおとなしかったようである。故郷の肥後では異性との交際はうるさく看視されたが、同性愛はむしろおおっぱらであつたと

書いてもいるから、二人の關係は男同士の普通の交際ではないものがいくらかあつたらしい。とはいつても、蘆花は山本覺馬の娘久栄との恋愛のあけく荒んだ精神状態に陥り、二十年十二月に同志社を去っている。だから、雲峰との關係は、青年同士のたんなる戯れにすぎなかつたとみるべきであらう。

受付によつてえられる金で、学資をまかなうつもりであつたらしい雲峰は、それだけではどうしても足りないばあいには、一年に二度か三度、父仁八郎に送金を頼んだようだ。だが依頼状には、誰もいないところで読んでほしいと断わり書きがあり、二人の兄に相談しても金策がつかないときは送金してもらわなくてもよいから、他の人にはいわないようにと、随分氣を使っている（杉井六郎「同志社と地方青年」『for PARENTS, 1977』参照）。かなり無理をおしての進學だったにちがいないが、父と、異腹ながら二人の兄はそれを諒承してくれていたようである。

雲峰が英学校邦語神学科卒業生の池袋清風に和歌を学びはじめのは、おそらく同志社へ入つて間もないころからであつたと思われる。清風は桂園派の歌人で、明治二十年代に

活躍した人だ。彼に学んだ和歌が雲峰の文学のベースになるのであり、その文学的生涯を決定づけたといつて過言ではない。

蘆花もまた雲峰とともに清風に学ぶが、和歌の出来は雲峰のほうがよかつたと先の小説に書いているし、明治二十年の夏休みには、雲峰は寮に残つて蚤にくわれながら、清風に借りてきた案山子の舎（清風の主宰した和歌の結社）の歌会ノートから、清風の丸がついている秀歌を写すなど、和歌の勉強をして過ぎしたとも、蘆花は書いている。

清風が社中の作品を選んで『浅瀬の波』初編を出版したのは明治二十一年六月であるが、雲峰が四首、蘆花が二首選ばれている。

おほる川いりえの月の影ふけて花のふきも寒き夜半かな

雲峰の作品はこのような歌であつた。

これより前、明治二十一年二月発行の『同志社文学雑誌』第十号に、雲峰の和歌五首が掲載されている。これが彼の作品が活字になった最初であるが、蘆花はすでに第二号に徳富健二郎の名で散文「孤墳之夕」を発表しており、これによつて彼は、一躍同志社内での存在を知られるようになったといわれている。



英学校時代の徳富蘆花

る。ただし、彼の寄稿はこれのみである。雲峰はその後、卒業までに主として和歌を三回同誌に掲載しており、二回目（第十七号）から雲峰のペンネームを用いるようになる。故郷の妙義、榛名などの名山にちなむ筆名であろうか。ただ本人の意思かどうか、案山子の舎では本名でとおしている。

明治二十二年六月二十七日、彼は二十五名の級友とともに英学校普通科を卒業して、東京の警醒社へ就職した（同志社校友会名簿「明治23・2発行」）。同期の卒業生には柏木義円、加藤延年、中瀬古六郎らがいた。

『女学雑誌』時代

警醒社に入社していたはずの磯貝雲峰は、明治二十三年には明治女学校の教員になって

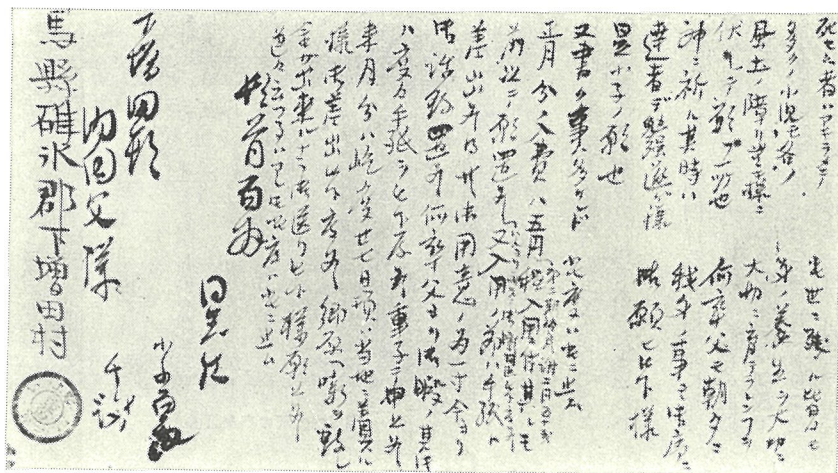
いる。だから警醒社は就職が確定するまでの一時的なものであったか、明治女学校の嚴本善治らの懇請による転職かのいずれかだろう。明治二十三年四月改刷の「明治女学校規則書」の末尾につけられている「職員表」に、教員磯貝由太郎、担当科目文学および数学と明記されており（『青山なを著作集』第二巻）、また、同年一月から発行が始められた講義録『通信女学』にも関係しており、その担当科目は「算術簿記」となっている（『女学雑誌』第一九三号）。だから、明治女学校の教員であつたことは疑いの余地がない。

だが、翌二十四年の「職員表」には雲峰の名は見当たらない。二十三年九月に書かれたと推定される父仁八郎宛の手紙に、「学校の方も時間が前より少し多くなり多忙なる故勉強が思ふ様にできず候依つて成るべく少しにし雑誌社の方も少しづつ書く様になし度と存じ昨日断り置申候」（磯崎嘉治「磯貝雲峰の生誕百年に際して」『日本古書通信』第二六一号）とあることから察して、自ら求める学問に時間を割くために辞任した可能性はありうる。明治女学校も当時、経営難だったようだから、学校側も、同校を発行母体とする『女

学雑誌』に専念するよう要請したのかもしれない。明治二十三年十二月六日発行の『女学雑誌』第二四二号から「付録女学」を毎月一回付けはじめるが、雲峰はその編集者になっている。「ムヤミに苦勞して金を取しとて益にもならず候故」一日に四時間ぐらい働いて二十円か二十五円ぐらい取り、あとは自分の勉強をしたいと先の手紙にあるから、その意思と学校の方針がたまたま一致しての異動であつたとみてよさそうである。

教員としての在職は一年であつたが、『女学雑誌』への寄稿は明治二十五年まで続けられた。最初の寄稿は第一八六号（明治22・11・9）に掲載した「池袋清風子の歌」で、これは清風の和歌を紹介した投稿であつた。そして同年十二月以降、ほとんど毎号なんらかの文章を掲げようになる。二十三年には読者の投書に答える「交詢」欄さえも担当しているから、教鞭をとるかたわら編集にも協力していたものと思われる。

主要な作品にはあとでふれたいと思うが、山田美妙はアンソロジー『新調 韻文青年唱歌集』（博文館、明治24・8）の序で、「温雅な雲峰子、端麗の残花子、一種飄逸な梅花道人」と



磯貝雲峰の書簡

評しており、そのころすでに詩人として着目されていたのは確かである。この二十四年の十月、おそらく女学雑誌社の派遣によって濃尾大地震による災害地を視察し、「震地の惨状、天下の仁士に告ぐ」(『女学雑誌』第二九一号)を掲げて救援のアピールをおこなうが、その後間もないころから、同誌への寄稿は減少する。

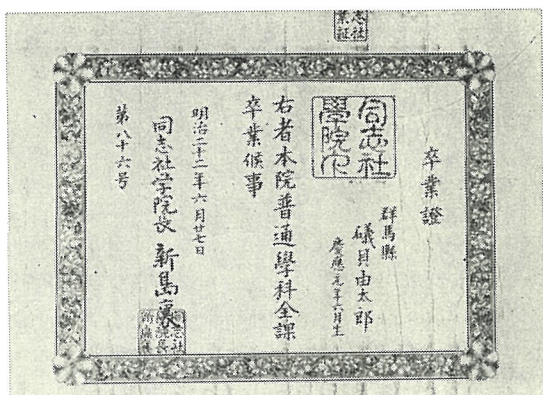
北村透谷のデビュー作ともいえる「厭世詩家と女性」が同誌に掲げられるのは、明治二十五年二月(第三〇三、三〇五号)で、彼の文才をかった主筆の巖本善治は、透谷に文芸批評欄を委ねようとしたようだが、透谷は編集には参画しなかった。しかし、彼の文章の掲載が目だって多くなるのは事実であり、逆に雲峰の作品が減少するのである。とはいっても、彼の代表的な評論「大西文学士香川景樹歌論に対する批評」が、二十五年十一月から十二月にかけて四回連載されるなど、同誌への寄稿を続けている。だから透谷や巖本らと意見を異にして確執があっ

たわけではなからう。

だが、雲峰はこの年の夏ころ女学雑誌社を去り、同志社女学校の教員になるのである。

同志社女学校教員時代と晩年

磯貝雲峰が同志社女学校の教員として着任するのは明治二十五年九月である(『同志社明治二十五年年度报告』および『同志社女学校期報』第一号参照)。この年女学校の学制が改正され、師範科、文学科、神学科の三科をおく専門科が開設されており、教頭松浦政泰とともに文学科を担当するため雲峰は招聘されたものと思われる。文学科での彼の担当科目は、国史中世、徒然草・方丈記、古今集、国文典、邦語作文翻訳などであった。これ以外に、当然ながら女学校普通科の授業があったはずだが、この二十五年の後半からは、作品の発表舞台が『女学雑誌』から『同志社文学』に移っているだけでなく、その第六十二号(明治26・2)から第六十六号まで編集を担当している。シルレル原作の訳詩「若武者」、『六合雑誌』に連載した「国詩論」などがこの時期の収穫であり、島崎藤村が雲峰を訪ねてくるのもこの時期である。おそらく彼



碓貝由太郎の卒業証書

の生涯のうち最も多忙で、かつ充実していたのは同志社女学校教員時代であったと思われる。

だが、その在職期間はわずかに一年に過ぎない。彼は二十六年九月に金城女学校の教頭として名古屋へ赴いているのである。同校でも学制改革がその年におこなわれており、『金城学院八十年史』、改革を断行したエラ・ヒ

ューストンに請われての割愛人事であったにちがいない。同志社女学校同窓会は、彼を大沢善助、デイヴィス夫人らとともに特別会員に推挙して功勞にむくいている（『女学校期報』第三号）。文筆のために教育をおろそかにするような人ではなかったであろう。

金城女学校へ移ってから、彼は『中京文学』や『同志社文学』に主として詩の発表を続けているが、それらは先の『国詩論』とともに、彼の成熟が感じられる。しかし金城女学校にも長くはとどまっていなかった。

明治二十八年夏、彼は同志社英学校の同期の卒業生であり金城女学校の前任教頭であった児島亀士とともに渡米し、翌二十九年にアーモスト大学に籍を置いた。目的は英詩・英文学の研究であったと思われる。だが、ほとんど学ぶいとまもなく肺結核に冒され、三十年夏ころ（推定）帰国して東京渋谷の仮寓で病養につとめていたが、同年十一月二十九日、三十二歳にして世を去った。

雲峰の文学

池袋清風に和歌を学ぶことによって文学活動を開始した雲峰は、清風を終生師として敬

愛し、清風もまた雲峰の才能と人柄を愛したようで、清風の編になる『浅瀬の波』第二編（『女学雑誌』社、明治27・4）には、雲峰の和歌を約五十首収録している。これは清風とその僚友井上通泰について多い作品数である。

そうしたこととおそらく無関係ではあるまいが、雲峰は新しい詩の基礎を和歌においた（『国詩論』）。それは詩の雅美の問題もあるが、それにもまして五七または七五の音数律へのこだわりによることであった。

雲峰に限らず、明治末期に自然主義の影響によって口語を詩語として採用するまでは、五七なり七五音数律と、それにもとづく定型によらなかつた詩人は、三十年代後半に象徴主義を標榜した蒲原有明くらいであろう。

雲峰の代表作とみなされている長篇詩「知盛卿」（『女学雑誌』第二四六号）も例外ではなく、当時は落合直文、北村透谷、山田美妙らによって長篇詩が書かれていたから、無情感の表現を除けばきわだった個性や新味は認めがたいといわねばならぬ。

そうした雲峰の詩で興味ぶかいのは、彼が讃美歌の譜にあわせて書いた作品で、次の「秋の夕故郷を想ふ」（同誌、第二三三号）が

その一例である。

一、ゆふかぜたち、ひかげ消えぬ、
空いとさびしく、くれ渡りぬ、

窓の戸、ひらきて、

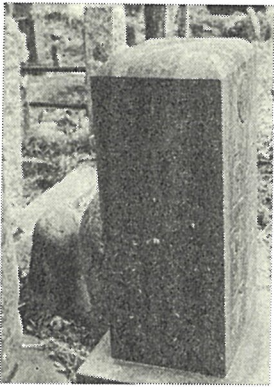
独りながむれば、おもひうかぶ。

(二連以下略)

この作品では六、八、四音など偶数音を駆使して、当時としてはきわめて斬新な試みであった。こうした詩を数篇残している。

だが、讃美歌の譜と無関係な詩はほぼすべて、五七でなければ七五であり、和歌の雅美というよりはむしろ感傷を脱しえなかった。

雲峰はしかし、伝統的な音数律や定型を墨守しようとしていたのではない。彼は和歌のそれを基礎としながら、その変調を模索していた。その一つの結実が讃美歌の譜による右



磯貝由太郎の墓（自性寺）

のような作品であった。譜によらず、しかもわが国の国語に適した定型の可能性をさぐっていた彼が、学ぶべき対象として見出したのは西欧の詩型である。元来、制約の多い詩型から出発しながら多様な詩型を創出したのは、西欧の詩人たちが詩型の技術に巧妙だったからだ。わが国においては、音数も自在であった万葉集から出発して逆の道をたどってきたのである（国詩論）。西欧の詩をより深く研究することによって、新しい詩への活路を見出したいと、おそらく雲峰は望み、留学を決意するに至ったのではないかと思われる。少なくともそれが理由の一つであったのは確かだろう。

残念ながら彼は道なかばにして倒れたが、彼が残した詩の幾篇かは同時代の詩人たちの作品にくらべて決して見劣りがするものではない。和歌という伝統文学に束縛されながら新しい詩型をもとめ続けたその文学的営為は、日本近代文学の過渡期の一典型であり象徴だといえそうで、彼の文学作品そのものよりも、むしろそのことのほうが興味ぶかく、かつ痛ましく思われるのである。

付 記

紙幅の関係もあって小説や歌論には言及できなかった。詳細は、拙稿「磯貝雲峰の生涯と文学」（『同志社談叢』第六号）に譲りたい。

参考文献に、山宮允著『書物と著者』、重久篤太郎『雲峰と明治文学』（『同志社時報』第四号）、手塚竜磨『薄倖の詩人・雲峰』（『同志社時報』第二三、二四号）などがある。

なお、同志社入学までの雲峰の経歴については、新島学園女子短期大学の乾義則氏のご教示をえた。記して謝意を表するものである。

（本部社史資料室室長）